「国語の力」の成立過程 Ⅶ

——国語教育学説史研究——

野地潤家

九（つづき）

本誌第七号に引用したように、「国語の力」四　文の律動　においては、モウルトンの「文学の近代的研究」から、五例引かれている。

「国語の力」の第四章ともいうべき「文の律動」は、つぎのような構成になっている。

一　一　心の律動
　　二　小供の音律感
二　三　韻律の考え方——（1）
　　四　文字を辞に翻訳する力
　　五　外辞と内辞
　　六　内辞の聴き方（一）——（2）
　　七　内辞の聴き方（二）
　　八　内辞の聴き方（三）
　　九　内辞に於ける単語
三　一〇　モンテッソリーの韻文教授法
　　一一　音群とアクセント
　　一二　歌の形
　　一三　ストレッスの影響——（3）
　　一四　強音の発達
四　一五　文化の律動
　　一六　合唱——（4）
　　一七　抒情詩の節奏
　　一八　謡物の節奏——（5）
　　一九　民謡・童謡・口語詩
五　二〇　視読の音感
　　二一　通読の速度
　　二二　総括

引用個所は、右のようであって、第一章・第二章にみられるような集中的な引用ではない。モウルトンの「文学の近代的研究」では、第一篇第一章の「文学の形態の諸要素」から、三例まで引用されている。その基本的な考えかたにおいて、垣内先生は、いつもモ

ウルトンを念頭におかれていたことがうかがわれる。「詩」・「散文」およびそれらの韻律の問題、「想韻」研究の問題、「文学反響」の問題、「民謡舞踊（パラバダンス）」の問題、「表出（プレゼンティション）」の問題など、モウルトンの研究の中から、特色ある考えかた・考察が、それぞれふまえられたり、援用されたりしているのである。

つぎに、五　国文学の体系　においては、つぎのように、引用されている。

五　国文学の体系

1　「読むことはその作用に依りて新しい人格と文化との創造に参加することである。モウルトンが創造は神秘的元初に於て終ったのでない。今もこれからも常に新しい人性と文化が創造されつつあるのである。神が土でかためた形に呼息をふき入れてそれを生かしたように、詩人は人間の心の中に魂を生かすのである。これを読むのは又実に再創造するのであるという意味もこのことをいうのであろう。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　二　認識の統一　二三八ページ）

1′　「宇宙の創造は、ある神秘的過去において終ったのではなく、それは、人が詩において自然の再創造をする間は、今も、また永遠に、つづくのである。創作的能力が、詩及び芸術の製作者の為に、並びに、その鑑賞の為に、必要とされる。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　結論　文学の伝統的及び近代的研究　五八七～五八八ページ）

1″　「伝説は、人間自身が最高の創造者によって大地の土から作られ、神の息（魂）を吹き込まれたということを語る。詩は、人間の息（魂）を吹き込まれた自然を我々に提出する。我々は、『詩篇』第八を、自然界のうえに人間の創作力を働かせることの大特許状であると考える。その章は人間を神の配下の総督として表わしている。偉大な天の創造者は、人間を――天と比しては乳のみ児にすぎないものを――神の代表者とした。人間自身の為に、謙遜の調子が打ち鳴らされている。（例詩、省略）しかし、この人間に、自然を支配する神の主権が委任されている。（例詩、省略）その統治権は物質的使用権によって制限されていない。人間の、自然に対する主権の一部は、再創造することである。かく、前に（第十三章）引用したサァ・トマス・ブラウンの言葉の精神において、創造の仕事は第六日目で止んだのではなかった。宇宙の創造は今なおつづけられ、人間は詩的自然を創造しつつあるのである。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第五篇　第二十章　人生及び自然のより高級な解釈としての文学　四一八～四二〇ページ）

1‴　「Poet『詩人』は希臘語で、或るものを作り若くは創造する人の意である。英国の詩人は『作る人（メイカー）』と呼ばれるのが常であった。新約エベソ書の或る韻文（二章十節）は、英語の聖書では『我等は神の作り給へるものなり』と訳されている。希臘語の原文では『我々は神の詩なり』とある。神は宇宙の造物主で創造者であり、我々は神が創造し、作ったものであるが如くに、詩人は想像的宇宙の創造者で、その宇宙を想像の人物と出来事とをもって充たす。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第一篇　第一章　文学の形態の諸要素　一五～一六ページ）

2　「又、モウルトンがPlotとMovementの区別を意識した（それは同じものゝ両面であることを弁明しては居るが）ことをもこゝ

に一例として附加えて置かなければならぬ。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　四　動機と態度　二四二ペ）

2′　「今一つの重要な区別は、プロットと進行とのそれである。前者は設計として考えられた芸術作品である。進行は詩の始めから終りまでの前進における計画を取り上げる。簡単な作品において は、この二つが同一であるかも知れない。即ち、プロットが進行にあるのである。複雑な作品においては、それらが別個であるかもしれない。それらは、同一のものの相異る相であり、そして、進行は、云わば、前進の建築である。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第六篇　第二十三章　詩的建築及び芸術的摂理としての筋　四三六ペ）

3　「かように動機と態度・プロットとの関係を考える時に、動機は直接に態度でもプロットでもなく、態度の連続はいい換えれば『文学思潮』と見ることができるし、モウルトンがプロットを説明して文学的建築であると共に芸術的摂理であると見るところによれば、その展開は文学思潮と本質に於て同一であると類推することができる。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　四　動機と態度　二四二～二四三ペ）

3′　「文学の芸術における最も基礎的な点は、筋の興味である。芸術作品としての物語は、多様における統一である。もし、すべての細部が、包括的統一の内部にあるように感ぜられるならば、その細部が多様であればある程、その芸術は豊である。プロットは、個々の場合への適用において、これを法式化しようとする。ある詩の一般的要旨を計画の言葉で述べることは、我々にプロットの興味を与える。この見地からすれば、プロットは詩の建築である。しかし、物語も亦人間的興味を持つ。この方面から見れば、プロットは、創作の範囲においては、現実の世界で或る者が神意（摂理）と呼び、また他の者は法と呼ぶところのものである。すべてのものは、一つの意味ある全体の部分として考えられる。各々の個々の物語は、創作者としては詩人を、その法の計画若くは摂理としてはプロットを持つところの小宇宙である。しかし、プロットのこの二つの相は密接に関係させられている。芸術における計画と人間的興味とは不可分である。故に、ある物語の摂理を形作るところの、根底をなす計画は、美感に訴えなければならない。（中略）プロットは、詩的建築であると同時に、また芸術的摂理である。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第六篇　第二十三章　詩的建築及び芸術的摂理としての筋　四三四ペ）

4　「モウルトンが文学史は『歴史』（ヒストリー）でない、『展開』（エボルーション）であると考えて居る如く文学の本質の読方はこの立場に於て始めて生々した作用となるのである。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　四　動機と態度　二四四ペ）

4′　「歴史は、語の普通の意味において過去の出来事に対して用いられる時、または、我々が自然歴史（博物）について云う場合の事物に対して用いられる時には、観察及び記録を意味する。それはかようにして、他のすべての研究が基づいているところの基礎を持っている。このことは他の研究に適用されると同様に文学研究にも適用される。しかし、ここで、我々は、今一つ、文学の内的及び外的研究の間に区別をすることが出来る。文学史は、この用語の普通の用法において見られるところでは、正に外的研究に属する。それは、個々の文学作品、個人の諸作（その歴史が文学的伝記となる）、

及び、国民の諸作品（国民文学は国民史の反映である）に関心を持つ。（中略）歴史が一般文学、若くは本書において世界文学と呼ばれているところのその変形、に適用せられた場合にはさような文学史は非常に文学的展開の形式を取る傾きがある。展開は個々の作品によりは、寧ろ、文学作品の根柢にある過程に関係している。それは文学的形態論を構成する諸形態及び種を取扱うか、または文学の精神及び職能における変化を取扱う。そしてこれを考察するのは文学批評の領域である。さような展開的分析は文学研究の最も奥底の部分を構成する。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第二篇　第五章　文学の内的及び外的研究　一二二～一二三ペ）

5　「モウルトンがバラードダンスを文学の原型であると考えたように日本文学に於て遡り得る最も古い形も『祈り』『語ること』『うた』が合体した律動の上に見出される。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　九　古代文学の特性　二五〇ペ）

5′　「文学的形態の根本的要素は民謡舞踊である。これは韻文と音楽の伴奏及び舞踊との結合である。そしてその舞踊は、その語が近代人の耳に暗示する通りのものではなく、模倣的及び暗示的所作であって、演説者の身振りはそれに最も近い遺物である。文学は、初めて自然発生的に現われる場合には、この形態をとる。主題若くは物語は直ちに韻文に綴られ、音楽に伴われ、所作によって暗示される。（中略）民謡舞踊は、かくの如く、今日では詩、音楽、舞踊という三つの別々の芸術となっているところのものの共通の幼芽である。（中略）民謡舞踊は文学の原型として残る。そして、結局、この原始的形態にまで、文学の他のすべての形態は跡づけられるであろう。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第一篇　第一章　文学の形態の諸要素　一〇～一一ペ）

6　「モウルトンの『世界文学』の如き概念が産み出され、又文学研究の体系にまで考えを及ぼしたのは最も自然な考え方である。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　九　古代文学の特性　二五一ペ）

6′　「私の第三の著作は『聖書の文学的研究、聖典に現われたる文学的形式の説明』についてであった。そして、これに従事しながら、私は生涯の十二年を、『近代読者の聖書』の編輯と、これが包む文学的構造の探求に没頭した。私の最後の仕事は、文学の世界全体を、個々の特殊の文学の集合としてではなく、英国人的立場から展望された『世界文学』の概念によって把握しようとする企てであった。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　序　三ペ）

6″　「世界文学は歴史的統一としての文学的材料を提出する。その本流は古典文学で、これは我々の文学的諸概念を決定する最高の発言権を持って来た。基督紀元第一世紀からこの本流は聖書の文学という姉妹的の流れを受け容れている。この後者は、その内容精神に関しては最初から有力であったが、まだ、文学的形態に対するその関係の十分な認識を待っていたのである。その文学の流れは、中世文化の諸時代及び共通の条件のもとを相並んで進む諸文学の諸時代を通り抜ける間に様々の支流を受け容れつづける。伝統的な理論並びに批評の明瞭な誤謬は、これらを導いた見解の狭さから主に起った。唯世界文学――個々の言語間の差異を離れて研究された文学――のみが、安じてそれから帰納がなし得られるところの文学的材料の一団を与える。世界文学においてのみ文学の一代記が完全に表わされることが出来る。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第

二篇　第四章　文学の分野の統一と世界文学の概念　一〇四～一〇五ペ）

6″　「全世界の文学は、すべての文学の総計を意味するに過ぎない。世界文学は、私の用語においては、与えられた見地から、多分観察者の国民的立脚点から、遠近画法の仕方によって見られた全世界の文学である。この二つの差異は、地理学と風景画の芸術とが同じ自然物を取扱う際の、互に異る扱い方によって説明される。（中略）どの場合においても、世界文学は真の統一であり、そして、すべての文学の統一の反映であるところの統一である。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第二篇　第四章　文学の分野の統一と世界文学の概念　九二～九三ペ　引用者注、「世界文学」〔マクミラン〕（六ペ）から、原著に引かれているものである。）

7　「現代文学は大体に於て四種類の類型を示す。その一は叙事文学特に小説、その二は劇文学、その三は詩特に抒情文学、その四は試論（モウルトンはPhilosophyという）である。この区分は又これまで引用したモウルトンの文学形態学の基礎概念であって、この四型が、恰も東西南北の方角のように、相互に関聯し、従ってその融解をも考え得るものであるが、この立場から、日本文学と世界的文学との連絡が成立し、更に回顧的展望的に、世界文学の概念を考えることができるのであって、モウルトンがこの四型に基いて、叙事文学・抒情文学・劇文学・試論の展開に関する研究を試みたように、日本文学の形態学的研究の立場から、世界的文学を統合し、その立場から『世界文学』の研究に進む時に、この四系素の研究が日本文学思潮の広い大きい幅を判然と示す手がかりとなり、各系素づけを確保することから国文学の体系が建立し得らるゝであろう。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　一四　如何に読むべきか　二六〇～二六一ペ）

7′　「これらの四つのもの、叙述と表出、詩と散文、は文学形態の東西南北である。これらは文学の四つの種類と考えらるべきではない。しかし羅針盤の東西南北の如く、これらは、文学的活動が動く四つの必然的方向を表わしている。文学は、民謡舞踊における出発点から発展して、その運動がこれら四つの方向に向けられているのを見出す。かくの如く向けられた運動の結果は文学形態の六つの要素を我々に与える。（中略）さて、これら、即ち、叙事詩、抒情詩、戯曲及び、歴史、哲学、雄弁、が文学形態の六つの要素である。しかし、この点において、文学形態論の基礎にまで達している誤解を避ける為に注意が払われなければならない。文学形態の六つの要素は、個々の文学作品が帰せらるべき文学の六つの種類として理解さるべきではない。これらは化学の諸元素に似ている。実際の文学にあっては、これらは、時には単独で見出され、より屢々組合わされて見出されるのである。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第一篇　第一章　文学の形態の諸要素　一八～二一ペ）

7″　なお、第三篇　世界文学の歴史に反映したものとしての文学の展開　には、第六章　詩と散文との分化　第七章　叙事詩における展開　第八章　戯曲における展開　第九章　抒情詩における展開　が収められている。

8　「現代小説は実にInterrational intercourseの一形式であって、モウルトンが『人性（ヒューマニチー）の科学』といったのも決していい過ぎではないと思う。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　一五　対象の統一　二六二ペ）

8′「近代世界がfiction（小説と呼ぶところの広大な文学は、この人生の科学と芸術に関係を持つ。本書の後章は、小説が人間性の科学の実験的方面に過ぎないことを主張するであろう。通俗雑誌は、多くの目的に役立つであろうけれども、それが人気を博すのは、主としてそれが現今生活の浮動文学であるが故である。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第三篇　第六章　詩と散文との分化　一四三～一四四ぺ）

8″「（近代小説の二つの特別の傾向のうち）、一つは、小説の興味が世界主義的になる傾向である。（中略）欧羅巴の種々の国民は、外来のものは他に何も読まなくても、お互に他国の小説は読む。小説を読むことは、国際的交際の一形式となる傾きがある。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第三篇　第七章　叙事詩における展開　一七七ぺ）

9「モウルトンがUniversal literatureとWorld literatureを区別して、前者は各国の超国民的文学の和である。後者は与えられたる視点即ち読む人の特殊な立場から透視的に見たる世界的文学の統一である。視点の置き方に依りては遠峯はただ雪を戴いて遠く彼方に聳ゆるのを眺めるのみであって、却って目前の池や樹木が、光景の中心として鮮やかに見えるように、超国民的なる『世界文学』も日本人とイギリス人とでは別の姿に見えるであろう、又イギリス人とフランス人にも別の姿に見えることであろうが、同じ歴史の中に生きる両国民にとりては、唯連互せる山脈が見る位置により光景が異なるように眺められるのである。それよりも更に『世界文学』は同一国民中の各個人に依りて、いろ〳〵に見られることをも認めねばならぬ。教養の広狭・個人性・指導者の影響等により、各自の個人的差異のあることをも認め得るのである。併しながら、どの場合に於ても『世界文学』は自己の読んだあらゆる文学的作品の統一の統一である。モウルトンが『世界的文学』と『世界文学』とを区別してかように考うるのは、文学を読むことを手がゝりとして自己の教養を心がけるものにとりては、是非とも明かにしなければならぬ一つの考え方である。」（有朋堂版「国語の力」

五　国文学の体系

一六　世界文学　二六六～二六七ぺ）

9′「我々は、現存のすべての文学の総計に与えられた名称に過ぎないところの全世界の文学と、我々が世界文学と呼んでもよいところのものとの間の区別をしなければならない。後者は与えられた見地から、多分読者の国民的文明の見地から、遠近法の仕方によって見られた全世界の文学である。私は別の著作において、文学的研究の真の分野としての世界文学の概念を十分に詳細にわたって述べた。私はその著作から、この用語の定義を引用することを許されるであろう。（「世界文学」〔マクミラン〕六頁）

全世界の文学は、すべての文学の総計を意味するに過ぎない。世界文学は、私の用語においては、与えられた見地から、多分観察者の国民的立脚点から、遠近画法の仕方によって見られた全世界の文学である。この二つの差異は、地理学と風景画の芸術とが同じ自然物を取扱う際の、互に異る扱い方によって説明される。我々が、高さ一万呎の山、面積四分の一エーカーにも及ばないところの樹に取り巻かれた池、百呎の高さにまで聳えている傾斜をなした牧場、長さ約四百哩の湖、を取扱わなければならないとする。地理学がこれら自然の地勢を認識する限りにおいては、これらすべては正確な高さ面積によって受け取られなければならない。しかし風景画は観点

を定めることによって始めるであろう。その観点から見れば、その風景の諸要素はその相対的の比率を変更するのが見られるであろう。遠くの山は雪の一点にまで小さくなり、池は目立った中心になり、樹が一本一本明瞭になり、牧場は遠方の柔い色をとり、その反対の側には、大きな湖が地平線の上に一条の銀となってあらわれるであろう。同様の遠近画法によって、世界文学は、英国人と日本人とにとっては別々の物であろう。英国人にとってはあれほど大きく見えるシェイクスピアは、日本人にとっては小さいものであろう。それに反して、一方の文学的風景において前景をなしている支那文学は、他方には殆んど認められないであろう。世界文学は英国人と仏蘭西人にとってさえも別々のものであろう。ただ、この場合においては、この両国民の相似た歴史が二つの風景の構成要素を非常に似たものにしていて、差異は主に部分の分布にある。こればかりではなく、世界文学は同じ国民の別々の個人にとっても別々のものであろう。明らかに、ある人は、より広い展望をもち、全世界の文学のより多くを受け容れるであろう。または、学生の個性、若くは、その学生に影響を与えた教師の個性、が独特の個人的排列に全体の多種多様な部分の焦点をあつめるところのレンズの役をして来たかもしれない。どの場合においても、世界文学は真の統一であり、そして、すべての文学の統一の反映であるところの統一である。（以上、「世界文学」からの引用。）

私は、この意味における世界文学の概念は、実際研究において文学の統一を実感するのに欠くべからざるものであると確信する。それは文学的教養の諸要求を充すと同時に、その根底に横わる諸原理の研究に対して適量の文学を与える。本書は当然、英語を話すもの

の文明の観点から書かれた。しかし、観点が仏蘭西、独逸若くは他の欧羅巴文明であったにしても、細部に異同があるだけで実質において結果は同じであろう。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」第二篇　第四章　文学の分野の統一と世界文学の概念　九一～九三ページ）

10　「モウルトンが現代の小説（フィクション）は International intercourse であるといったことは、広く文学一般に就いていうこともできるのであろう。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　一六世界文学　二六九ページ）

10′　「欧羅巴の種々の国民は、外来のものは他に何も説まなくても、お互に他国の小説は読む。小説を読むことは、国際的交際の一形式となる傾きがある。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第三篇　第七章　叙事詩における展開　一七七ページ）

11　「モウルトンの主張する形態学的研究の態度に於ては、決して希臘以来の伝襲的な修辞学や文法等に依りて作品を規律することでなくして、かくの如き『形式』の体系的発生的展開を対象としたのである。（在来過まって客観的態度と考えたものは、却って主観的態度であって、形態学的研究の低級なる方法的予備以上のものではない。）素よりモウルトンの所説は尚お不徹底（ママ）たるを免れ得ないのであるが、その方向を更に進展せしむる時に、形態学的研究の態度は、研究の対象を確保して、方法的根柢を堅固にすることができるであろう。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　十八（ママ）再び形式に就いて　二七一～二七二ページ）

11′　「この第一篇の題目は文学的形態論、即ち、種々の文学的形態と、その根底に横わる原理とであった。これら種々の形態は、我

々が今見た如くに、解釈における主要な要因である。この問題の伝統的取扱いは、古典的過去の死んだ手が、唯一度或る型を定め、それを後の時代の作家が守らなければならないかのように、これら文学的諸形態を静的であると屢々考えて来た。これは『種類についての謬見』で、これが批評史に繰り返し現われ、そして、繰り返し覆えされて来た。文学における形態は展開の事であり、文学が前進するにつれて新しい形態が現われて、より古い形態が変更される。形態の六つの要素――叙事詩、抒情詩、戯曲、歴史、哲学、雄弁――は、それに特殊の作品が帰せらるべき、互に排他的の、文学の六つの種類ではない。化学の元素のように、これらは特殊の作品の中で結合することが出来て、これら諸要素の融合は文学的效果の源となる。読者が読むところのものに対して取る態度は解釈者の態度である。彼は、先ず、眼の前にある文学と一般文学とに徴して、その根底に横わる形態の解釈を試みなければならない。彼はその時、形態が意味の解釈を助けることを見出すであろう。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第一篇　第三章　文学解釈の鍵　文学の形態　八六～八七ぺ）

11　なお、11は、特定の引用をふまえているというよりも、モウルトンの形態学的研究の態度と方法とを問題にしているため、引用提示はむずかしい。

12　「内容は作品から内化した表象でもなく、プロットでもない。能産の作用を逆行してこれ等の限界に達する時に、その内面に於て遥かに広大なる世界を展望することができる。モウルトンが比喩的に芸術的摂理という語を以て示した統一の上に『内容』を認むることができる。かくの如き内容はあり合せの題材でも、借ものでも、こしらえものでもない。それを捉らえて引据えた、目前の事でもなく、目前の機でもない。それ等を超越した高次的なる立場に於てのみ感ずることを得るところの活躍する生命の流動である。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　十九　再び内容に就いて　二七三ぺ）

12′　「文学の芸術における最も基礎的な点は、筋の興味である。芸術作品としての物語は、多様における統一である。もし、すべての細部が、包括的統一の内部にあるように感ぜられるならば、その細部が多様であればある程、その芸術は豊である。（中略）プロットは、詩的建築であると同時に、また芸術的摂理である。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第六篇　第二十三章　詩的建築及び芸術的摂理としての筋　四三四ぺ）

13　「モウルトンがフィクションから出たフィクチアス（虚構）を挙げて、文学内容に対する偏見の潜在を指摘したのも、そうした考えがかなり広い考え方であることを示すのであるが、問題は彼のいう如く頗簡単である。即ち文学の内容は人格的統一の表現であるほど、事実の報告ではないから、仮作であるが併しながら虚構ではない。事実でないものは非事実で、真に反するもののみが偽である。世に『偽に白いうそ、黒いうそがあるがその最大なものは統計である』という諺がある。統計は最も事実の正確なる表彰である筈であるが、その読方によりては、我々の国語でいえば真赤なうそを構えることがあり得る。人生の科学である小説は数学的に事実を報告するものでないがそうした三色のうそのいずれでもないといったのも面白い。而して人性の真相を滲み切った話方で示すものが、どうして仮作虚構といわるゝものであろうか。」（有朋堂版「国語の

力」　五　国文学の体系　十九　再び内容に就いて　二七四～二七五ぺ）

13′「この議論の劈頭において我々は広く拡がっているところの、語の不幸な混同――fictiticous（本来は『作られたる』の意だが、普通『虚構の』『虚偽の』の意に用いられる）なる語を、殆んどfalse（『偽の』）の同義語とするところの混同――に躓く。ある社会において、それが『彼等をうそつきに育てるかも知れない』という心配から、親が、子供の小説を読むことを禁ずるのを、私は知っている。さような意見を聞いて微笑むだろうところの多くの読者が、もし自身をよく吟味したら、やはり心の奥底で小説（フィクション）を許さるべき偽と云ったようなものだと考えているのを見出すかも知れない。語のこの誤用は更により基礎的な混同の一部分――それに向って（ママ）注意が屢々喚起されるが、誤解は依然として持続する――即ち、事実と真（理）との混同である。私は、立派な人々が、事実は真理と同じものではないという主張を聞かされる時に、実際に立腹するのを見たことがある。人は、かかる人々が、イエスの譬話を如何に見做すかしらと思うであろう。何人も、これらの譬話が事実の記録であるとは想像しないであろう。それを最高の真理以外のものであると考えるものがあるか？　譬話は、単に、真理を伝える手段として用いられたfiction（小説）の一形態に過ぎない。

事実と真理との二つの概念が、思想の別々の範囲に属するということは、いくら強調しても、しすぎるということはない。事実は真理でない――尤も事実は真理となされうるところの或るものではあるけれども。他の相違のことは暫く措くとしても、事実は個々のものに関係を持ち、真理は普遍的である。私が文机を叩いて、それが堅いということを見出す。それは真理ではない。それに符合する真理を見出す為に私は、（例えば）堅い表面は、それが我々の筋肉に与える抵抗力によって知覚されると云う時の如く、普遍化することが出来なければならない。真理の反対は虚偽である。事実の逆は何か他の事実である。私が机を叩いて、それを堅いと思う場合には、これは、私がそれを軟いとか、暖い（ママ）とか、ねばねばしているとか思ったからであろう。事実は、普遍化によって真理が拵えられうるところの原料である。しかし、それは、同じ程度に、虚偽の原料でもある。通俗的な警句の云うところによると、三つの程度の偽がある――即ち、原級、白い偽（罪のないうそ）、比較級、黒いうそ（腹黒いうそ）、最上級、統計、がこれである。しかし、統計は事実である。そして、事実としては全く正確でありながら、――例えば悪い政党の手によって――奇怪な虚偽に仕上げられ得るところの大きな一団の統計を考えることは容易である。さて事実が真理か虚偽か、いずれかの原料とすれば、同様に、虚構の事は、真理か虚偽か、いずれかの原料である。事実と虚構の事との間の差異は、事実は、たまたま起った個々のことであるのに対し、虚構の事は、起ったかもしれないところの、起るであろうところの、または、或る事情のもとに起らなければならないところの個々の事である、ということである。事実を虚構のことと区別するところのものは、偶然の要素である。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第五篇　第十八章　思惟の一様式としての物語　三九二～三九四ぺ）

13″「創作小説は、現実の人生の制限変更であり、観察を、選ばれた事態にまで、また、根底をなす諸原理を表わすのに好都合とし本能的に選択された諸条件にまで拡張する。ある物語を『組立て

る』ことは、人生の科学において実験を組立てることである。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第五篇　第十八章　思惟の一様式としての物語　三九六ページ）

14　「たとえばモウルトンが『解釈の批評主義論』の立場から、センツベリーの『主観的批評主義論』を論ずる態度にもこれを見る。併しながら、モウルトンが文学の研究は徹頭徹尾、解釈（インタープレテーション）であるということと、センツベリーが享け入れた印象を表現宣伝することであるということとの間には共通の精神が認められる。即ちモウルトンの解釈の意味は文学を解釈することを以て自然と人生との創造的作用であると見るのであり、センツベリーの主観的批評論も亦ある作品の研究の手がかりから、新しい或物を見出すことであって、いずれも再創造的作用であり再構成的体験である。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　二〇　判断の統一　二七七ページ）

14′　「批評は文学を討議する文学である。他の諸々の型は、その見地として、討議される文学を持つ。主観的批評は、批評家に興味を持つ。批評の行為によって、批評家は作家となる。主観的批評は、この作家の、文学に対する寄与である。我々の、詩の理論は、芸術の創作と並べて、感応的鑑賞を強調した。相次ぐ読者から来る感応的鑑賞は、それ自身単独で文学を作る。セインツベリ氏が云っているように、好悪は批評における事実である。これらの事実が主観的批評を構成する。創作的芸術の虹は、より少い光輝で、そのアーチ形全体に従うところの第二の虹を持つ。あらゆる単独な詩、若くは製作的文学作品において、夥しい交叉する光が、あらゆる批評の角度から、その上にくる。文学の上に投げられるこれらの交叉した光は、文学それ自身の中に入り込み、種々の、そして独立した興味となる。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」・第四篇　第十六章　主観的批評、若くは文学として承認される批評　三七二ページ）

14″　「しかし、文学は人生の批評以上である。詩及び芸術から来る事物の解釈は、それが同時に解釈し且つ創作するという意味において、より高い解釈である。詩的理想化は、それが触れるところのものを高めるけれども、唯始めて解釈することによってのみ高める。科学によって表わされる自然は、創作的詩がそれに基づいて働くところの自然よりも、劣ったものである。もう一度、我々は静的と展開的との間の区別を持つ。宇宙の創造は、ある神秘的過去において終ったのではなく、それは、人が詩において自然の再創造をする間は、今も、また永遠に、つづくのである。創作的能力が、詩及び芸術の製作者の為に、並びに、その鑑賞の為に、必要とされる。あらゆる詩の愛好者は、自身も亦、詩人である。そして、この世には、芸術創作に決して具体化されない沢山の詩がある。

文学理論における最初及び最後の言葉は解釈である。帰納的解釈の批評は、他のすべての批評がそれに基づくところの基礎である。ただ、読者は、彼の観念を文学の観察によって立証する時にのみ、判断者となることが出来る。理論家は、文学的形態の展開を解釈した時にのみ、それらが具体化している文学を理解することすら出来るのである。そして、彼が、かようにして解釈しようとする文学芸術は、それ自身、自然及び人生の創作的解釈である。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　結論　文学の伝統的及び近代的研究　五八七～五八八ページ）

15　「帰納的批評は自由批評の反対であるように見える。その欠点は作品の煩瑣なる分解に没頭してその本質に就いて理解の欠乏せ

ることゝ見らるゝのであるが、それは印象批評に対する客観批評の負うべきものであって、モウルトンの主張するごとき『解釈』の態度は決して低級なる訓詁的解釈ではない。また作品の意味を追随して、作者が書こうと思ったものを理解するに止まるものでもない。その立場から『世界文学』の体系的発生的研究を目指すものである。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　二〇　判断の統一　二七八ページ）

15′　「帰納法は、実証的科学にとっては正しいであろうが、それが作用しうべき実証的なるものが少しも見出され得ないところの文学芸術においては、それは存立しない、と反対論者は云うであろう。既に見て来た如く、真の芸術は絵画若くは戯曲の具体的な細部にあるのでなくして、これら細部が観者に与うべき印象にある。そして、これらの印象は主観的であって、観者によって異り、かくして実証性を欠く。さて、もしこのすべてが帰納的文学解釈の困難の一例として主張されるならば、そこには幾分の根拠があるであろう。それは、この過程そのものに対する反対論としては何等の力を持たない。最も実証的な科学においてすら、外的自然の細部は、別々の観察者に別々の印象を与えるであろう。その結果、天文学は『個人的誤り』若くは、『機械の誤り』を斟酌しなければならない。しかし、彼はこの種の諸困難を如何に処理するか？　新鮮な観察によってである。文学のすべての取扱いにおいて、人によって異る主観的印象は、困難な問題である。しかし、帰納的解釈者は、観察しつつある文学に幾度も繰り返し訴えることによって、その困難に応ずる手段を持つ。具体的なる細部は芸術それ自身ではなく、それは主観的印象への客観的制限を構成する。そして、帰納的研究の諸結果は常に仮のものであり、意見のすべての相違を排除するところの説明がない場合には有効である。他面において、文学芸術は、帰納的方法の分野として、他の諸研究にまさる一つの強味を持つ。即ち、それは、調和させらるべき証拠を厳密に制限することである。もし私が、歴史的科学において、絶対的に諸事実を満足させるところの、ヘンリ八世の性格に関しての或る理論を展開させることが出来るとしても、その私の精緻な理論は、明日にも、全然新しい証拠の一脈が発見されれば、それによって容易に覆されるのである。多量の証拠がシェイクスピアのヘンリ八世に向って閉鎖されているのである。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第四篇　第十三章　帰納的批評または解釈の批評　三一一～三一二ページ）

15″　「近代批評は文学的実践を方式に表わして文学理論をたてる点において、アリストートゥルに従ってもよい。しかし、それは、世界文学が概観されるべき分野を、世界文学の全範囲にまで拡げることによって始めなければならない。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第四篇　第十章　文学批評の諸型とその伝統的混乱　二五八ページ）

15‴　「しかし近代的批評は、又批評それ自身の概念を拡張し、四つの相異る型を識別しなければならない。我々は先ず第一に帰納的批評を持つ。これは、解釈と展開的分類の目的で、あるがままの或る特殊の文学を吟味することである。これは他のすべての種類の批評に欠くべからざる基礎である。勿論、裁判官的気質の批評家は、もし彼が、研究して来た文学を理解しなかったり、誤解したりしたならば、彼の評価または理論は地に墜ちるであろうということを認めるであろう。彼が多分気がつかないところのことは、かような純

粋な解釈は、判断の観念を全然除外しているところの過程によってのみ可能となるということである。我々は、第二に、文学理論若くは文学の方向に向うところの思索的批評を持つ。第三に、承認された原理を個々の文学作品に適用することであるところの判断的批評にとっての沢山の余地がある。しかし、如何なる種類でもの文学批評が、それ自身文学として取扱われて、その批評家を作家として表わす時に、第四の形が生ずる。理論の一項目として許容されないかも知れないところのものが、それにも拘らず文学的実施によって、高い興味と価値とを持つかも知れない。或る人々は、この自由批評若くは主観的批評は、すべてのうち最も重要な批評であると考えるであろう。批評のこれら四つの型は、ある特殊の討議において如何に混じていようとも、職能においては明らかに別個である。伝統的批評は、これら四つの型のうちの唯一つのものによる批評の全分野の無意識的借取であった。批評の観念は、判断の観念に狭められた。そして判断的態度を除外しなければならないところの解釈を容れるべき余地が残されていなかった。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」第四篇　第十章　文学批評の諸型とその伝統的混乱　二五九～二六〇ページ）

16　「然るに読方と綴方、解釈と作文、批評と創作とは、常に融和を欠き、特に最後の批評と創作との乖離は常に反復せらるゝのであるが、もし読方・解釈・批評が作品の産出の作用に少しのこだわりなく随伴して精密にその展開を跡づける態度に出ずるならば臆見と独断とから免れて、これ等の間に和解が成立つであろう。モウルトンの解釈の批評主義論の如きはその一型と見ることができるのである。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　二二　国語の力　二八五ページ）

16′　「文学の評価のあらゆる企て、正しさのあらゆる評価は、それが適用される文学が正しく理解されていることを仮定している。本章が示そうと努めて来たところのことは、かような、文学を正確に理解する過程は、判断的観念からの提出がある間は行われることが出来ないということである。そこから、ホガースの逆説が起ってくる――鑑識家を除くすべてのものが絵画の判断者である。判断を形造ることに慣らされた心は、芸術の或る範囲内においては、普通の心より以上に、多くのものを見るであろう。しかし、思いがけないものが入り込んでくる場合に、受容的態度の総体的再調節が必要とされる場合に、心は、普通でない要素はあるべきではないところの或るものではないかと思うところの、安易な仕方を選ぶならば、普通人より多くのものを見はしないであろう。批評家のうち最も判断的なものは、公平でなければならず、偏見を持ってはならないということを知っている。しかし、創造における開拓者に追いつこうとする同感的努力にとっては、公平の意識以上に多くのものが必要である。かように、芸術においては、判断は、それ自身が偏見――新奇なるものに対する偏見――である。

（中略）　文学に対する近代的態度は、評価と判断とを除外しない。しかし、それは、判断の批評が、最も自由な帰納的吟味の過程によって先行されなければならないということ、及び、かくして、批評における最も基礎的な要素は、解釈の批評であるということを認める。」（本多顕彰訳「文学の近代的研究」　第四篇　第十三章　帰納的批評または解釈の批評　三四六～三四七ページ）

17　「徳川時代の初期に現われたる文学は中世文学の特性を継承し、文化的中心でなくなった京都大阪に現われた文学であって、時

代の姿である放縦なる個性の奔放の中にも、中世精神が絡みついて居るのであって、その極限に於て現われた古代精神・中世精神の、『文学反響』Literary echoの中より、近代文学の特性を見ることができるのであろう。知識階級に於ける反響は擬古的でもあった。市民の心に響いた時にパロデーともなった。田園の人の心の中には牧歌的な響をも伝えた。併しながらこの全面を統率するものは近代精神の遅鈍な展開であった。」（有朋堂版「国語の力」　五　国文学の体系　一一　近世文学の特性　二五三ページ）

17′「実際我々は詩的効果の一半はここで文学的反響と呼ぶところのものの基礎に依存していると云ってもよい程である。文芸復興につづく詩の成熟において、その均衡の穏健は、詩における遠心的衝動及び求心的衝動としての、ロマンティックなるもの及び古典的なるもの――新鮮と新奇とに頼るロマンティックなるものと、承認された諸々の形式と調和してそれ自身を廻転し、内在的に美しいところのものに親密と回想との附加的美を与えるところの古典的なるもの――の合一にかかっているということを、我々は既に見て来た。意味されているところのことは、ある詩人が伝統的材料を用いるという単なる事実ではない。その反響は、最も微細な部分――形容語、名称、文の構造、表現の転向――にすら及んでいる。類似があるという事実の怠惰な承認ではいけない。その類似は回想であるが、『反響』の微妙な微弱さにまで沈められた回想である。」（本多顯彰訳「文学の近代的研究」　第六篇　第二十五章　文学的反響　第二の自然としての文学の概念　五二一ページ）

以上のように、「国語の力」の第五章ともいうべき、「五　国文学の体系」には、モウルトンの「文学の近代的研究」からの引用（おしまいの17は、モウルトンという名の見えない、間接引用に属するもの。）が17例も見られる。

「国語の力」の「五　国文学の体系」は、つぎのような構成になっている。

一　一　国文学の対象
　　二　認識の統一――（1）
　　三　独創的なるもの
　　四　動機と態度――（2）（3）（4）
　　五　文学思潮の意味
　　六　日本文学の歴史的研究
二　七　日本文学思潮の読方
　　八　日本文学思潮の大勢
　　九　古代文学の特性――（5）（6）
　　十　中世文学の特性
　　一一　近世文学の特性――（17）
　　一二　世界的文学
三　一三　何を読むべきか
　　一四　如何に読むべきか――（7）
　　一五　対象の統一――（8）
四　一六　世界文学――（9）（10）
　　一七　全体と体系
　　一八　再び形式に就いて――（11）
　　一九　再び内容に就いて――（12）（13）
　　二〇　判断の統一――（14）（15）

二一　再び「読む力」に就いて
五　二二　国語の力――（16）
二三　文化の創造

モウルトンの所説を引用したり、それに言及したりしている個所は、右に示したとおりである。「国文学の体系」一～五まで、全般にわたって、引用・援用・言及のなされていることを知るのである。

これらの引用を、モウルトンの「文学の近代的研究」について見ると、つぎのようである。

序論　近代的研究の優勢なる観念―統一、帰納、展開――（6′）
第一篇　文学形態論　文学の多様とその根底に横わる原理
第一章　文学の形態の諸要素――（1‴）（5′）（7′）
第三章　文学解釈の鍵（ママ）　文学の形態――（11′）
第二篇　文学研究の分野と範囲
第四章　文学の分野の統一と世界文学の概念――（6″）（6‴）（9′）
第五章　文学の内的及び外的研究――（4′）
第三篇　世界文学の歴史に反映したものとしての文学の展開
第六章　詩と散文との分化――（7″）（8′）
第七章　叙事詩における展開――（7″）（8″）（10′）
第八章　戯曲における展開――（7″）
第九章　抒情詩における展開――（7″）
第四篇　文学批評、伝統的混乱と近代的復興
第十章　文学批評の諸型とその伝統的混乱――（15″）（15‴）
第十三章　帰納的批評または解釈の批評――（15′）（16′）
第十六章　主観的批評、若くは文学として承認される批評（14′）
第五篇　哲学の一様式としての文学
第十八章　思惟の一様式としての物語――（13′）（13″）
第二十章　人生及び自然の高級な解釈としての文学――（1″）
第六篇　芸術の一様式としての文学
第二十三章　詩的建築及び芸術的摂理としての筋（プロット）――（2′）（3′）（12′）
第二十五章　文学的反響、第二の自然としての文学の概念――（17′）
結論　文学の伝統的並びに近代的研究――（1′）（14″）

右の各章下に記入したように、「序論」・「結論」のほか、六篇一五章から引用されている。「国語の力」の各章（一～四）に比べれば、この第五章「国文学の体系」には、もっとも多くの引用・言及がなされていることになる。随処に必要に応じて、モウルトンからの自在な引用がなされ、モウルトンへの言及がなされているのである。

「国語の力」の第五章に位置づけられている「五　国文学の体系」は、一　解釈の力、二　文の形、三　言語の活力、四　文の律動、に比べて、垣内松三先生が年来考究され、おそらくは講述されてきた領域であって、最も力のこもったものである。この領域の論述にあたって、モウルトンの「文学の近代的研究」から、縦横に引用され、また、ふまえられているのは、垣内先生のモウルトンへの傾倒ぶりと合わせて考えて、当然のことと思われる。[1] 文学形態論、

文学原型としての民謡舞踊論、[3]世界的文学と世界文学の考え方、[4]文学（各形態）展開論、[4]文学批評――就中、帰納的批評、解釈の考え方、[5]哲学の一様式としての文学観、[6]プロット論、[7]文学的反響観、など、モウルトンの基本的な考え方は、あますところなく摂取され、活用されているといってよい。しかも、これらの摂取・活用は、単なる借用によるものではなく、じゅうぶん消化した上でなされている。時には、批判的にも扱ってある。

「国語の力」のうち、とくに、五 国文学の体系 の成立にあたっては、モウルトンの近代的文学研究法を摂取し、吟味して、それを基本にしていることがわかる。「国文学の体系」自体、日本文学研究の立場と方法とを求めていて、方法論意識がきわめて鮮明である。モウルトンの「文学の近代的研究」も、伝統的研究から近代的研究へ脱皮すべく、明確な方法意識に貫かれているものであって、その面から、「国文学の体系」探索に対して、示唆する点が多いものであった。モウルトンの文学研究面で成果しえたものを、日本文学研究において、最大限に利用しえているといえよう。

なお、「国語の力」成立の契機ともなった、「国語の力」所収の長野講演「国語教授と国語教育」には、モウルトンに関する言及が三例見られる。主として、作文教授に関して援用されているのである。講述に際し、モウルトンの所説に、立論の端緒を得ていられるのである。

しかし、「在来の希臘伝来の修辞学を排して、モウルトンが考えたように、またモウルトンの考えでは、まだ不徹底である点を補充して、」（有朋堂版「国語の力」、三一四～三一五ぺ）と述べてあるように、モウルトンへの単純な傾倒でなかったことは、注目される。

（昭和39年7月19日稿）（本学助教授）